

故山岡順太郎翁追憶会の記

拝啓 時下益々御清祥の御事と御喜び申し上げます

さて今年の秋も漸く深くなり往時追懐にふさはしい季節であります
故山岡順太郎が昭和三年十一月二十六日物故致しましてより本年は三十年目になりますので 生前故人と御縁故の深かった方々に御参会を賜はり聯か故人追憶の小会を左記に依り開催致したいと存じます

就ては公私御多忙の折柄誠に御迷惑とは存じますが御繰合せの上御来駕下さいますれば幸甚の至で御座います

右略儀乍ら書中を以て御案内旁々御願申し上げます 敬具

昭和三十二年十一月八日

岸 田 幸 雄
孫 山 岡 康
様

故 山岡順太郎追憶懇談会

日 時 十一月二十二日(金) 午後四時三十分

場 所 大阪市東区今橋五丁目十一番地

大阪倶楽部 電話大阪(23) 八三六一―三

追て

粗末なる晩餐の準備を致しますので御手数数乍ら御出席の有無を
来る十七日までに同封葉書を以て御回示賜りますよう併せて御
願申上ます なほ簡単な懇談会でありますので一切の御配慮等
必ず御無用に願います

山岡順太郎氏の一周忌に

佛を大樹に偲ふ時雨哉

故月 斗

故山岡翁追悼の会合を先般大阪クラブで催したときの会の速記があったので、其の反古にするのも残念に思つて、後日の記念のため印刷しました。

御寸閑の時に御高覧願えれば幸甚と存じます。

当日会場に寄せられた挨拶電文

○ 衆議院議長 益谷秀次氏

故山岡順太郎先生の御遺徳をしのび謹んで御冥福を御祈り申し上げます。

○ 渥美育郎氏

山岡尊大人の御英霊に対し、尽きざる敬慕の情を捧げます。

○ 白杵善三郎氏

翁の御遺業をしのび敬慕に堪へず。

挨拶

岸田 幸雄

(拍手) 僭越ではございますが、私、きょうの会の主催者として、まして最初に一言お礼を兼ねてごあいさつを申し上げます。

かねて書面をもって御案内いたしましたごとく本日この会場で、もとの山岡順太郎を追憶する会をとり設けようと存じまして、皆様方に御案内を申し上げましたところ、御列席の皆様方はいずれも公私わめて御繁多の方々ばかりでございまするにもかかわらず、特にお繰り合せを賜わりまして、かように多数御参会を賜わりまして、中には東京方面からも牧野良三先生御夫妻を初め野村治一良さんとか、内田茂さんとか、あるいはもとの日本電力の関係の皆さんなど御臨席をいただいております。また岐阜の武藤知事さんも八十八才の御高齢であるにもかかわらず特に御貴臨を賜わりまして、錦上花を添えていただきましたことは、まことに故人に対する変らざる御懇情の賜と存じまして、私、衷心より感銘、感謝の至りにたえないのでございます。

実は先ころからよく故人を知っておる方々から、私の顔を見ると、一度山岡翁の会をやってみたらどうかというお話がございました。私自身は山岡の息子じゃないのでありますが、どこか調子が似ているのか何か知りませんが、いつも私の顔を見ると皆さん方が山岡の話なさいますので、まあこれも私にとって故人の余恵だと思つて、適当な機会にかような会を持ちたいと思つておりました。この春亡くなった村田省蔵さんのごときは、いつも「岸田君、一ぺんやろうじゃないか」というようなことをおっしゃっておったのですが、思いも設けず早く亡くなりました。これはひとつ早くやらんと、ぜひ出ていただきたい

方が欠けてはまことに残念だと思つておる矢先に(笑声) ちょうど本年本月は故人が歿しましてから三十年目になるのであります。来週の二十六日がちょうど祥月命日でございます。その日を選びたかったのであります。会場の都合がございまして、繰り上げてこの席を本日借りることができたのであります。

この席を借りましたのも故人が生前このクラブのメンバーであつてこれを利用しておりましたので、この席がよかろうかというような思いつきにほかなりません。

そういうわけで、きょうはまことにささやかな会合で、何ら設けもございませんが、ひとつ秋の夜長でもありまするし、まあ往時三十年すんでみれば早いものでございますが、その間に諸種の変遷もございしますが、この機会に久々で故人を偲んでいただいて、故人の關係しました事業や、あるいは学校の今日の状態のお話を伺うということも、また皆様にとつて御興趣が深いことではないかと、かような気持ちいたします。人間生活はときに過去を顧みることが、やがて永遠にわたる将来へのまた希望にもなり、飛躍にもなるというような感じもいたしました。単なる追憶というよりは、またこれで皆様方の明日への新しい御工夫、御構想にもなれば、望外の喜びと存じます。

ついでに申し上げますが、皆さん御承知の通り故人山岡翁はああいう磊落な人でありましたが、一面風雅の志があると申しますか、あの本居宣長翁の「敷島の和心を人問わば」という歌から子供たちに名前をつけましたが、長男の倭君も早く歿しあとの兄弟もみな歿しまして、実は私の家内「しま」というのが、兄弟姉妹の中では、まだ年若い関係でもありまあおかげ様で元気でございます。倭君の方は子供

さんが四人ございまして長女は養子を迎えて、これも幸福に暮らしておられますし、男の子は三人ございまして、きょうも参っておりますが、康君と弥君と順君と三人ございまして幸いにみんな健在でございます。其他の関係のまあ外孫になる連中も相当多数おりまして、きょうもかれこれ参っておるものもございしますが、かようなわけで三十年すぎ去りましたが、まあ山岡の關係一族もまずまず健在で無事に暮らしておりますから、その点はどうぞ御安心を願います。

そういうわけで、きょうは何の意味もない、単に故人を偲ぶ追憶会というようなことでときをすごしていただきまするなれば、まことに光栄、かつ欣快の至りでございます。そこで食後皆さんから御時間の許す限りお話を伺いたいとは存じますが、非常に御多忙な方々も多数見えております、途中で御退席なさらねばならぬ方がございまするので、そういう方に二、三食事の始まる前にお話を伺いたいと存じますから、その点も皆様どうぞ御了承をお願いいたします。(拍手)

杉 道 助 氏

(拍手) 私は山岡先生に、このクラブで何十年前前によく昼食でお目にかかったのでございますけれども、私ごときかけ出しは、その間の距離があまり遠いので親しくお話をしたようなわけでもないんで、追憶談をするほど私には何がないんであります、令息の倭君とは同学であります、しかも同じような運動競技をしておったような関係上、非常に親しくしております。その関係上、山岡家の方々とはいろんな御懇誼を願っておるようなわけであります、大阪クラブ、そ

の当時にとまどきここでお目にかかって、同じ食卓に列したようなときもありましたんで、いろいろお話を承わったこともあるようですけれども、いま記憶しておるようなお話というものはないのであります。ただいつかでしたが、どういう意味ですか、ひとつ住宅地を經營するには柏原付近がよくはないか、そういうことをひとつ考えてみたらどうか、というお話を、この食卓の間で承わったことがあったんですが、ただ親しくお話を、耳に残っておるのはそれだけでありますけど。しかしながら、始終大阪クラブでお目にかかるときに、ほおうつとしたあの風容というものが非常に印象的でありまして、その当時にはそういう方も二、三ありましたが、当時はああいうふうな人格の方がないので、実にこう非常な伶俐な、利口な方は今日非常に多いですけども、山岡先生のようなほおうつとしたおうような、しかもすべてのものをみ込んでいるというような風格の方が非常に乏しいので、今日このお写真に……接しましても、ますます追慕の念にたえないと同時に、今後ああいう方が出て、そして多くの人をのみ込むというような方が出られることがいいのじゃないかということを、特にこの席で感じたようなわけであります。私、特に申し上げることはありませんが、そういう意味において尊敬をし、追慕しておる次第でございます。どうもありがとうございました。(拍手)

牧 野 良 三 氏

(拍手) きょうの御案内をいただきまして、その際に一番しまいのところ、山岡順太郎氏の一周忌に月斗の句で「面影を大樹に偲ぶ時

「雨かな」これをじつと読んでおられますと、実に月斗という俳人は故人を解すること私と同じだ、まことにこの句がうれしかった。で、家内を連れまして「山岡さんの写真を見に行こう」といつて出かけて参りました。故人くらい私に深い感銘を与えたお方はないのであります。

一体故人のおかげで私が中橋徳五郎翁と一生を結ばれることができたとということができるのであります。皆さん御承知のように中橋翁は実にむつかしい人であり、むつかしいということを最も知っておるのは故人と堀さんであつたと思います。それを私に「頼むぞ」といつて年若い私に託されたのであります。中橋翁という人はスチールでこしらえた大きな機械のような人で、この人を動かしていくということとは容易なことじゃないが、山岡順太郎という人物がいて、これが常に潤滑油となつて中橋徳五郎という鋼鉄の大きな機械を動かしたんであります。

まず第一に原内閣に入閣する、文部大臣となるときもそうであり、まず。一体原という人は皮肉な人であり、何にも言わないで、「中橋君、君入閣してくれ、入閣を承諾するね」といつて承諾してから「文部大臣を引き受けてくれ」と言われたのであります。それはよほどあの中橋という人が困り抜いたのであります。帰つてきて、わきに山岡順太郎さんがいて、私と三人で話をしたときに故人は「受けるのか受けないのかという問題じゃない、ただあなたが文部大臣としてやることに遺漏なき方法を講ずるよりほかしようがない」という、すぐ結論を言われたのであります。そのように頭が早いのであります。西園寺公の書記官長南弘君を配することが一番だ、これも山岡さんがちゃんとこまを置いたのであります。そうして「一体西園寺さんの承諾も

得なければならぬが大丈夫かい」「大丈夫引き受けさせていただきますよ」と言うので、南弘さんを文部次官に承諾させて、世間には問題もないような顔をして文部大臣を引き受けしたのであります。原という人はそのときに中橋でなければ全国へ向つて高等教育機関を無事に立て上げるというやつがないということでもやられた。皮肉な作戦であつたので「実業界の金持ちが来て、日本の文教を自由にするなん」といつとは僭越至極だ、いわんや、大阪の実業界から来るなん」といつてまあ実に大阪のそのころの実業界というものに対してばかにして、無理解な政界の連中、ことに貴族院の連中は総攻撃を食わせたのであります。それが、それによく耐えるときに山岡さん、故人が潤滑油としてほとんどわきについていくのであります。

世の中に女房役という言葉がございますが、中橋翁に配するに故人をもつてしたということは、私は正にこれだと思つております。あの時期において中橋翁を文部大臣として、今日に至るまでの磐石の基礎を築かせたのは山岡翁があつたからで向う意気の荒い新聞記者でも何でも片っ端からしかり、怒らせてしまう人のわきにおつて女房役を勤めてくれたのが故人でございます。

その際に私がいじめと感じたことがございます。それは日露戦争の話でございます。児玉源太郎参謀総長が中橋徳五郎と近藤廉平とを呼んで、「いよいよ戦争をやらなければならぬが金はない。ともかく輸送を引き受けろ、金がないんだが輸送を一切引き受けてくれ」といつて相談をされた。そのときに近藤廉平は、「事は重大ですから重役と相談しなければ御返事ができませんからしばらく待つてくれ」といつた。ところが中橋徳五郎は、「よろしゅうございます。お引き受けします」

といった。そうしたら児玉源太郎は、近藤廉平の前の言葉があつて「君、大丈夫かい」と言った。ところが「だつて負けりゃもらえないことはきまつている。勝ちや金を政府は出すにきまつているから、もう考へる余地はないじゃありませんか」と言ったので、それで児玉源太郎という人がすっかり中橋徳五郎にほれ込んだというのでありますが、これは私は中橋という人は実業家としては行き過ぎだと思ひます。近藤廉平の態度の方がほんとうだと思ひますが、ここで実業家のみで行く人と、国を憂えて政治で行く人との違いがここに出てきたんだと思ひますが、そのときやはり後についたのが山岡順太郎、故人であつたことを思うのであります。

私は私自身ずいぶんこの二人が思い切つて私を振り回したのであります。まして、青年牧野はその始め通信省の役人をしていたのであります。それを中橋翁が自分の秘書役に第一次ヨーロッパ戦争が始まつたときに、私を商船会社へ迎えてくれたのであります。三月たつて「牧野君、僕はきよう社員に演説をするから筆記してくれ」と言う、「はい」と言つて、演説を聞きだすと「諸君、私はきよう限り大阪商船会社の社長をやめます」と言うのです。ひどいことをする人だなあと思つたのであります。私は役人をよしてきたんですからねえ。そして中橋という人の秘書役で木村清の下で次席をやつたんです。これはひどいことをやる人だと思つたけれど、やむを得ない。それから翌年、一月の二十五日に大隈内閣で総選挙になる。すぐ金沢の選挙に行く。山岡さんが「選挙違反をするから、それが困る」と言つて私が法律家であるのゆえをもつて金沢の選挙にやつたのです。そうして源円という宿屋に山岡さん、私を隣の部屋に泊めておいて、毎日使つてほぞのおを切

つて以来初めて政談演説というものの壇上に立つたのであります。それから御承知の大へんな石川県選挙無効の訴訟になつたのであります。すると、「牧野、君は弁護士になれえ」とこう言うのであります。そうして私を弁護士にしたのであります。女房は役人のところへといで来たのである。大阪商船の社員になるのも反対であります。いわんや私が弁護士など「私はあんた弁護士のところへ嫁に来たのじゃない」と言つてだいぶ手きびしくやられたのであります。が、弁護士をさせられて生まれて初めて選挙法というものの研究に従事して、それからついこんな道楽者になつたのであります。しかし商船会社におることわずか一年であります。今日まで四十年の間、大阪の実業界の方々にこんなに御知己を賜わつておるのは全く中橋翁と故人のおかげでございます。感謝にたえません。

しこうして、大阪では「北」と「南」を非常に勉強さしていただきまして（笑声）ついに東京へ帰りましてからは依然として花柳界に妙な関係を持つておりますが、まあどうも売春汚職にもかかわりませず、何の心配なくして今日に至つておりますのは、故人の指導に深く感激するものがありました。ここで故人の写真の前に立つと感慨無量でございます。つつしんで故人に謝意を表して今日の追憶の言葉といたします。（拍手）

武 藤 嘉 門 氏

満座の皆様方には、ほんとうに御高齢の方々が多いのでありまして、非常に私は喜ばしく存じておるのであります。

今夕故山岡先生の追懐のお話があるということで、隣の牧野君からいろいろお話がありまして、なるほど追懐というのものはああいこうとを述べるものだというのを、今初めて伺ったのでありますが、私は山岡先生の追懐は、どういうことがあったかということを私、繰返して考えてみますと、山岡先生が日本電力を創立になりまして、そうして飛騨川の水利権を取って、私がお供をして飛騨から帰りますときに、ここに列席の杉木祐二君が細君を迎えるといって、山岡さんの秘書をしながら杉木君は自分の嫁さんの話だけをしきりにやっていたもんですから、山岡さんは「杉木君は今夜、その嫁のところへ行くといいので、どうにも話がいかが、杉木君というものか」というお話で、飛騨から岐阜まで自動車の中は杉木君の今夜の喜びを山岡さんは述べずめにしてみえた、杉木君はそれを喜んで、自來杉木君は山岡さんの秘書として実に勤勉これ至らざるなく勤められたんであります、なおそういうことが山岡さんの非常な特徴じゃと思っております。

ことに私はその後に、日本電力の開業の日でありましたが、飛騨の萩原というところへ行つて、大勢の新聞記者を初め大勢のお客様を山岡さんが御招待になりましてそうして宴会がすんで、狭いところでどうにもならん小さい宿屋にみんなで押し込まれて泊りました。社長なども非常に狭いところへ押し込まれて、みんながその宿屋で閉口したんですが、そのときに私のはじまる前に宿屋の女将に「今夜僕は疲れとるで按摩を頼んでおいてくれ」といって頼みましたら、「よろしゅうございませう」といって女将が請合ってくれたんですから、私はその晩按摩にかかり得られると思つて寝ておりましたが、とうとう一夜中按摩は来なかつたんで、翌朝、朝飯のときにそれを女将に不足言い

ますると「いや按摩は来ましたんだ」と、こういう話で「そんなこと言つたつて、おれのところへ来やせなんだ」と言つたら、山岡さんが「それはおれのところへ来たのかな」といってお話です。私が頼んだ按摩は山岡さんをもんで、それなりで下つてしまつた。山岡さんは自分で頼まん按摩が来て、何とも言わずに山岡さんはその按摩を使つてしまひになつたのです。これが先刻牧野さんのおっしゃるやうに、何にも拘泥しないことが山岡さんの特徴じゃと思つております。自來さういふやうな目に何べんか（笑声）あいましたから、山岡さんの特徴といふものはさういふとこだなと思つています。自來今日まで八十余年の間、私は常に人間の特徴とか、えらいとかいふところは、さういふところから自然に発生するものだというのをしみじみ考えています。山岡さんの追懐をせよということでありませう、山岡さんにはさういふものに拘泥なさらないといふえらいところのあつたということをしみじみ思ひまして、追懐を申し上げるわけであります。

ことに私は当時、山岡さんはよほどの御老人だと私も思つておりましたから、常にさういふ意味において御老人のお扱いをいたしておつたんでありますが、今日に至つてみますと、その山岡さんの老人は、私はさうの昔に通り越えてしまひまして、（笑声）今日では山岡さんの老人を一向思ひ出さないやうな立場に立つておりました、はなはだ申訳ない。（笑声）みづから恥かしいと考えておりますが、あの山岡さんの当時のお齡は一体私から言つと五十幾つというので、ごくまだ若い人だつたんでありますから、今日考えてみまして、私もあの五十幾つ若いときならば、どんなことをするだろうといふことをしみじみ思ひ出しますわけでありませう。それについて私、なお今夕皆

様へ御披露申し上げてみたいと思いますのは、先刻御披露がありましたように私も八十八になりました、山岡さんより以上であります。が、ここにおいでの方野君などの御斡旋によりまして、今年米寿の祝を県下の先輩の方々からいただいたんであります。その前に私どもの岐阜の鵜飼を帝室の御招待で、世界から来ておる各国の大使、公使が見に来まして、その晩にイタリーの大使が言われますには「世界で年寄でなお八十以上になってかくしゃくとして仕事をしておるのは、世界ではイギリスのチャーチルであるが、岐阜県の知事はそれより越してやっとなるから」と、こういう話がありまして、一体イタリーの大使の話には、チャーチルは自分が八十になったときに「おれは百まで生きるんだ」と、百まで生きるんだから、写真屋を呼んで「毎年おれとこへ来て写真をとれ」ということをチャーチルは写真屋と約束された。そうすると写真屋が言うには「あなたが百まで写真をとらしていただけるならば、私は毎年来て必ず写真をとりますから、どうぞ写真をとらして下さい」ということをチャーチルに言うたということで、しかるに、そういう約束をされたチャーチルは今なお生きておるけれども、それをとらしてもらうと行って約束した写真屋は先に死んでしまった（笑声） こういうことで、人間は八十から以上ということとはむつかしいという話をしきりにイタリーの大使がされましたから、私はそのときに直ちに答えてやりましたのは、チャーチルは百まで生きるといつて写真屋に約束されたかも存じませんが、私はその百まで生きるなんていう約束はしません。私は百と約束しましたが、もうあと十二年よりほかないので、それが毎年一年ずつ減っていくのであるから、非常に気色も悪いから（笑声） 私はそういう約束は一切い

たしません。日本のチャーチルは、百というようなことはきけません（笑声） 私は今まで生きただけこれからも生きるときめると（笑声） そういうことで、毎年私は向うへ一年ずつふえていきますから、一向死ぬとき、あるいはもうこれが最後だと思いう機会がないのでありますから、（笑声） 私は今まで生きただけこれからも生きると、こういうふうにきめておりますので、それを思いますと、山岡さんは八十とおきめになったか、百とおきめになったか知らんが、非常にお若いときに御逝去になりましたことは、私は幾重にも残念に存じております。これが山岡さんに対する私は今でもなお惜しいことであつたということをしみじみ考えまして、私はどうぞ今まで生きただけこれから生きるから、来年からはまだ八十九年生きますし、再来年からは更にまだ九十年生きると、こう考えておるのでありますから、満堂の皆様方にもどうぞこの上ともに御愛顧を下さいますようお願いいたします（笑声） ごあいさつ申し上げます。（拍手）

岩崎 卯一氏

（拍手） 私も司会者がおっしゃいましたようにちょっとほかに用事がございますので、先に回顧談をせよという御命令で、立つたのでありますが、今日お集まりになったお方の顔触れを拝見いたしますと、ほんとうに知った方が少いのであります、飯島さんとか、またわが大学の教授であられた水谷さんとかいう方は存じておりますが、ほかの方はほとんど存じないのであります。それにもかかわらず関西大学の教務を預っております私がこへ立つのは一体どういう因縁

だろうと思われる方が多いと思います。ところが山岡順太郎先生は今から三十五年前に関西大学の、今位置してあります千里山に学校の基礎を築いていただいた方なのであります。

関西大学の歴史は七十年でございますが、ちょうどそのまん中の三十五年目に山岡順太郎先生が、当時としては大阪の実業界の巨頭が、名もなき一私立大学に手をつけるなんということは想像もできなかったことなのであります。五十五、六才でおありになったと思う山岡先生が、自分の当時の子分四人を引き連れて関西大学の理事陣を構成されたのであります。四人の子分と申しますと、みんなそのとき、私は三十才の一番若い教授で、初めて山岡順太郎先生が総理事になり、その四人の子分の方が理事になり、理事会をやっておいでになるのをこちらは見とつたのであります。その子分と申しますのは、ただいまお話に出ました木村清という方と、佐竹三吾さんとそれから村田省蔵さん、それから宮島綱男という四人の方であります。みんな当時四十代の方じゃなかったかと思っております。

私が最初に受けました印象はです。この茫洋とした大西郷のような山岡順太郎先生がですね、当時見る陰もない関西大学の理事室にどっしり総理事として坐られて、その周囲に集まった子分の方はもう俊敏そのもので、ちょうどセバードを思わせるような人ばかりです。ね、（笑声）議論でも筋道が立っておるし、われわれから今考えると、あまりにも秀才というような人ばかり揃っておった。その自分と性格の全く違う俊敏そのものような人をですね、この茫洋とした山岡順太郎先生が率いていかれる。その風格というものは、今でもその印象に残っております。

そして山岡先生は非常に独創的な人でございまして、当時関西大学を千里山に持つていくのも、山岡先生の御意思であったのであります。が、関西大学をそこにつくれば千里山は大へんい大学になる、そのいいところの意味がですね、頭のいいのはみんな国立へ行くんだからですね、良いところの子供で、からだの弱い人間は千里山にすれば、空気もいいし、それから私立大学のことだしのんびりしているだろう。それだから人間は、頭のいいのはみんな国立へ行つて、役人にでもなつたらいいのだ。ところがいいところの子供でからだの弱い、のんびり育てるものは、千里山の関大に収容したらいいのだ、こういうような話を一番最初に申されたんであります。これまた奇想天外でありまして、秀才主義そのものをみんな憧れておるときにですね、大学の方針を定むべき山岡順太郎先生がこういうことを言われた。

それから関西大学にもそれまで学歌というものがあつたのであります。が、せっかく千里山に行つて大学令による大学になつた。ときに中橋文相を呼んでこられてあの見る陰もなかつた大学に、千里山に呼んでこられて文相の講演をわれわれ聞いたんですが、せっかく新しい大学ができたんだから、学歌も変えたいらいたいと思う。そこで服部嘉香という当時詩人でありますが、関西大学の教授をしつた人に学歌を作つていただいて、山田耕作氏に作曲してもらつた。その中で山岡さんがただ一言言われた、それが今の関西大学の学歌に入っているのです。が「真理の討究、学の実化」——真理の討究というものは、これはわかつておるのです。ね、どこの大学でもやっていることなんで、ところがその実際に役に立たぬ学問は何にもならんぞと、こうおっしゃるのです。ね、それだから特に大阪の大学としては、学の実践化とでもむつ

かしくいえばいうのです。そういうものに関西大学は力を入れるというお話があったんです。そこで総理事の論言はあたかも汗のごとしという、それを関西大学の学歌に入れまして、真理の討究、学の実化というものがわが大学の「モットー」である。山岡先生が長く御生存になりましたならば、この学の実化の方に力を入れたのでありましようが、その後わが大学の集めました教授のほとんど九十パーセントは京都大学の出身者でありますし、こういう人たちは学の実化を好まないのですね、やっぱり真理の討究、アカデミックと、こういうことはかりいつておりました。従ってその方面に力を入れなかったのですが、最近学の実化の方に力を入れようじゃないか、それで大阪の実業界ともっと連絡をとって、そしてやっていこうじゃないかという気分がみなぎっております。従ってわが大学でも近く山岡先生を追慕する、何らかの儀式も持ちたいと思うのですがそれからついでに、山岡倭さんですね、御息、この山岡倭さんがまだ三十代でありましたが、いつも「ヤッチャンヤッチャン」といって、関西大学のボートなんかに「ヤッチャン」という名前をつけてですね、倭さんが寄付されたことがある「ヤッチャン」というのはだれだろうと思って、「ヤッチャン」という名前だけは知っています。しかしどういう人か、子供には違いないだろうと思う。今日初めてその「ヤッチャン」が大きいなられた「ヤッチャン」を見て、実にその顔を見ると、倭君にそっくりであって、親子よくこんな似るものかしらんと今思ったのであります。

こういうわけで親子二代、わが関西大学に関係していただいて、関西大学の基礎ですね、六割までは実に山岡親子でつくったといってもいいだろうと思うのです。

私個人としては大へん山岡先生に可愛がられて、あの茫洋たる山岡さんが、実はそうではないのだ、すいも甘いもかみ分けた人であって他の一面を持っておられたということを知っておりますが、それは私個人に関することから申し上げません。

それで結びの言葉として、何年か前に私が大学審議会の委員として文部省から兵庫県に派遣された、主として兵庫県の県立の大学を審査に行ったんです。そこにはしなくも岸田知事を見たんです。私は二水会に関係いたしておりましたので、当時若手の連中の会でありまして、そのときの岸田知事は俊敏派の方で、いかにも秀才らしい顔をしておられたように思うのですが、私の好みには合わないのですけれども、ところが兵庫県で見た幾年か後の岸田知事はですね、似たりも似たり、アゴヒゲがあればですね、山岡順太郎先生じゃないかと思うように太ってきて、またしかも茫洋となってきた。そこで私はですね岸田さんに言ったんです。覚えておられると思う。「知事の仕事なんというものはすぐ忘れられてしまうのだ。行政的にどんな実績をあげたって、それは時の経過とともにすべて忘れられるのだ。ただ学校を一つ岸田時代に残しておきなさい、それから、兵庫県立の大学がみんな国立になりたがっておるそれはおやめなさい、どんな苦しくても、兵庫県立として大学を残されたらいいのだ、これを岸田君の兵庫県に残す唯一の仕事としておやりなさい」と私おすすめしたことを、私は覚えておられるかどうか知りません。従って今日といえども兵庫県は県立として大学を日本で一番たくさん持つておるのです。これまた山岡さんの衣鉢を受けられた岸田君なり、また先代が生きておられたならば、関大だけじゃなくて、ほかの大学にも手をつけられたかもしれませんが、

また山岡先生のこととはわが大学には永遠に残るのであります。そういう意味において山岡先生に対する追懐の情と、また感謝を新たにすることを次第であります。(拍手)

野村 治一良氏

私、野村治一良でございます。皆様には非常にごぶさたをいたしておりましたが、当年八十二才になったのでございます。おそらく山岡先生を御承知の方で私が一番年かさであり、古くから存じておるのじゃないかというふうに思うのでございます。

私が山岡さんにお目にかかったのは明治三十一年でございます。その当時私は朝日新聞の記者をしておりまして、中橋先生のところへときどき参ったことがございます。ちょうど三十一年の終りに北京に留学を命ぜられまして、朝日から北京へ参りますときに、中橋さんのところへ参りまして、いろいろ御指示を承りましたときに、山岡さんから当時金百円也の餞別をもらったことが、これが山岡さんに会う私の初めでございます。

それから三十三年の終りになりました、義和団の騒ぎでむつかしくなると同時に、私の一身上の関係から北京を引揚げまして、日本へ帰ってきました。それが十一月だったと思います。それで山岡さんのところへ、そのときに実は、当時三十一年に百円の餞別をもらったということが私としては非常にうれしかったので、お礼に行ったことがございます。そしてしばらくしてから山岡さんが「ちよつと話があるから君、来ないか」という話で参りましたところが「どうもお前、だい

ぶん新聞社で疲れているようだから、もうやめていいかげんにこつちへこないか」というお話を承わりまして、三十三年の十一月でございました。初めて一等社員に採用されまして、二十八円の月給で行ったのが山岡さんの文書課長の時代でございます。おそらく皆さんの中に、そういう古いことを申し上げるのは、私が一番古いのじゃないかと思つて、実はここへ立たしていただきました。私の今日長命を保つて、皆さんのお知合いを長く蒙つて世間のお世話、もしくは最近ではいろんな世話役を命ぜられましてやっておりますことで、非常に自分の余生を楽しんでおることは、山岡先生が私の二十四才の時からしじゅう変らざる受顧をしていただいたことのおかげと思つて、平素非常に先生を慕つておる次第でございます。

先ほどから皆様からお話ございました、特に大阪商船時代のごことは、多くの皆さんから開陳されたのでございますが、大阪商船が大正に入りましてから人材を集めて、あの大きなことができたということは、これは山岡さんの人を採用されることがこの功をなしたということであつて、商船に人材が集まつて、商船があすこまでいったということが、翁の人を集められた徳じゃないかと存じます。ちよつどそのころを申しますと、池尾君もそうでありまして、それから先ほどの牧野君もそうであります。また故人になりましたけれども、中川浅之助かと、あるいはきようは二世の下村君が来ておりますがあれの親父の下村耕次郎これは私の友人でございます。こういう方々はみな山岡さんのメガネに適うて入社されたのでございます。多くの方々が商船の大をなされる中橋さんの下に集つて、そういう人材を配列されたことに対しては、将来ともに尽きざる一つの先生の徳の賜と存じまし

て、私もその余恵に預つておりました一人でございます。今日のこの機会において故翁に対して非常にお礼を申し上げるとともに、皆様も御同感だと存じますが今日はいい会合を開いていただきまして、故人を偲ぶことを得ましたことは、私の終生の徳とするところであります。深く岸田さん初め主催をして下さいました方々にお礼を申し上げます。以上ごあいさつを申し上げます。(拍手)

飯 島 幡 司 氏

(拍手) 私は山岡先生とは、年も親子ほど違いますし、(笑声) いや、その通りであります。(笑声) 商船会社のサークルで育つた男ではございませんので、あまり近づいてじつと拝見したことはないんで、まあ富士山が白い雪を頂いているのを下から眺めておるように、りつぱだなあと思つて、はるかに見上げておつた程度のことでございます。従つてあれこれと具体的なお話を申し上げるほどの記憶を持ち合せないのでございます。

ただ私が大阪鉄工所、今の松原与三松さんがやつておられます日立造船でございますが、その専務をいたしておりました時分、初めは取締役支配人として入りまして、それから専務をいたしました。その時分に山岡先生は相談役をして下さいました。毎半期に決算ができませんと、私はお宅へお伺いをいたしまして、その案について御意見を承わつたことを覚えておる。それが二、三度あるいは四、五度あつたかと思ひます。終りの方には、すでに病氣になつておられまして、床上に坐りながら真っ白なシートでカバーした床の上に坐りながら、何

かと御注意を承つたことがございます。先ごろから杉さんがボンヤリとしたという、茫洋という言葉がしきりに出るんであります。なるほど面影は茫洋としておられるようでありますが、私とそのバランスシートを前に差し上げて伺いました話は、決してボンヤリとはしておられなかつたんであります。ただ小さい数字のことは何にも言われないう、大きな数字だけはちゃんとかまえてはつきりとした意見を言われて、ときには、これはこう直すべきじゃないかといったようなところまで、重役会でかけてきたものをおっしゃつた例も記憶しております。ボンヤリとした人、そんなに世間に珍らしくはないのです。多すぎるほどボンヤリした人は今日でもあるんです。それからまたこまかい数字を扱う方は幾らもあるんですが、大きな数字をつかまえて、そして前期はこうであつた、今度はこうなるべきであるといったような大綱をちゃんとつかまえておる会社の社長、重役というものは、だんだん今の世間には少なくなつてきておるようには思ふのであります。そういう意味で尊い人であつたと思ひます。

容貌はごらんの通り魁偉と言つていい容貌だと思ひます。容貌魁偉という言葉が一番当る方だつたと思ひますが、しかし、床の上に坐つて何か溶衣か何か軽いものを着ておられるときに、私、ふつと感じたことですが非常に肌のきめのこまかい、何と申しますか、さわつてみたいような気持のする方だつた。(笑声) 私もその時分は三十年代でございますから、まだそういう感覚が残つてあつたんです。今日だつたら実はとてもその肌の感覚なんでものに気がつかなかつただろうと思ひます。で、先ごろから岸田さんがだんだん似てみえるというお話がございますが、似たもの夫婦とか申しまして、岸田御夫妻どちらもよ

く似て見えるようにだんだん思います。(笑声) そのうちでも容貌魁偉の方は岸田さんの御主人がだんだん相続をされますし、肌がいつまでもきれいで若々しいのは、奥様の方が伝えておられます。(笑声、拍手) 先ごろから故人の余恵という言葉も出ておりますが、親御さんの余恵というものは、まことにありがたいものだと思つて、私はひそかにうらやましい気持ちでおりますのでございます。

そういうような場合に、山岡先生が晩年に最も力を入れておられたあの黒部の話がちよくちよくと出ました。当時黒部、たしか四十万キロといったんですか、大きな計画ですね、あんなバカなことをしてという話も世間にはあつたんであります。これは皆さん御記憶のことと思います。そういうことに対して、「なあに、仕事を始める者はみんな世間から罵倒されるものだよ」ということを一言おっしゃつたことを私は記憶しておるんであります。それで思い出しますが、このごろはああいう型の人だんだん少くなりましたが、大阪にも昔は飛び離れたことを計画して、それをやりとげる方がポツポツございました。私の記憶に上ってくるだけの第一人の人は、たとえば岩下清周さん——セイシューさんと申しておりますがキョチカさんの方が本当のようでありますが、あの生駒のトンネルを掘り抜いた、これなども当時は罵倒されたものです。何か事故がありまして、数人の人夫が死んだことがあります。それに新聞記者がインタビューに行くと、これだけの事業に五人や六人死んだって何だいといったようなことを平気で言い得るような腹を持っている人であります。

その次にはやっぱり私は黒部をとり上げたいと思うのです。床の上の話で、当時何か黒部をやりとげるまでの予算は六千万円か、六千五

百万円かであつたと思うのですが、「結局は一億かかるよ」と、こうおっしゃつたことをまた思い出しますのであります。で、小林一三さんは岩下さんの流れをくむ人であります。それから山岡さんの流れをくんで電力界に進出した人は、その後たくさん出ておるのであります。一番初めの事をやるということは、非常に大切なことで、またむづかしいことであるんであります。

ついでにもう一人、私の先生であられた方でありますから、名前をあげておきたいと思いますが、あの大阪市長をしておられた関一さんが今のこの地下鉄をおつくりになりました。あのときも非常に罵倒されたんです。何か二十何百万円かの市債をお起しになって、当時としてはえらい金らしいですが、そのときに私、関先生の学生でありますから、ときどき市長室へお伺いいたしました「評判悪いですね、先生」というと、黙つて下を向いておつて、ふつと顔を上げて、「飯島君、できたら、みんな喜ぶよ」と一言言つて、何も弁解も何もなさらずに「おい、飯食いに行こうか」と言つて、夕方「南」の方へ連れて行かれたことを覚えておる。そういうような感じの人がだんだんなくなつてくるということが非常にさびしいように思いますのであります。大きな数字をつかみ得る人、そして鋭い人で、そして大きな仕事を計画してやり抜く。大阪の経済的な勢力がだんだんほかの都市に抜かれそうになつておられますときに、特に私は山岡さんのような人を思い出しまして、山岡門下でおられる方も今日もなおたくさん生存しておられるのでありますから、大阪のために御尽力を願いたいということをお願いいたしました。私のできさつにかえさしていただきます。ありがとうございました。(拍手)

岡田 永太郎氏

私は大阪商船に関係しまして、約十年くらい前まで、追放になるまで大阪商船におったものであります。そもそも私が大阪商船に入りましたのは、野村大先輩よりもややあとでございます。自分の年がほぼわかるんであります。明治、ちよつと小さい声で言いますが、三十四年でございます。初めて私は石原一松という方の御紹介によりまして、一緒に大阪商船の本社、当時安治川にありました赤いレンガ作りのうちの二階であつたんであります。そこに参りました。山岡さんは当時の文書課長——総務部長とでも申しますか、今では。その文書課長をしていらしたんであります。まず私は石原という方と一緒に参りまして、次席をしておる石崎震二という方であつたんです。この方は実に大きな方で、まるで力士の太起のような六尺以上もあるかなというような、三十貫も四十貫もあるかと思うような大きな石崎さんが次席をしておられたんです。私もそういう大きい人は相撲さん以外に見たことがないので、商船会社はすいぶん大きい人がおるなと思つて驚いたのであります。そして戸を一つ中へ入りますというところ、山岡さんがいらしたのであります。同じようにお写真にありますよ。な、実に容貌魁偉な、ひげぼうぼうたる人で一見日本人と見えないような方がいらしたのです。私驚いちゃつたんです。それで私と一緒に参つた石原さんが、「山岡さんだ」という話で、山岡さんは実にすさまじい格好であるにかかわらず、きわめて温顔で、やさしい目でもつてお迎えになりました。「君が今度会社に見える岡田君か、」というような話で、まあ話はすぐに済んで、「それじゃ社長がいらつしやるから、

いいとこだ、案内しよう」というのでまた戸を一枚開けまして社長室に入ったんです。中橋徳五郎さんが社長であつたのであります。これはからだは小さい方でありますが、同じくひげぼうぼうとあごひげの多い人で、すいぶん私も驚いたのであります。「商船会社はそろいもそろつて異常な人物が、えらい人かなんかがいらつしやるな」と思つて、ひそかに私は驚いたような次第であります。それが明治三十四年、今より五十何年前であります。それ以来私は商船会社で、何と申しますか、真実に真面目に御奉公いたしました。そして後にまあ外国の方もやつていただいたのであります。私が外国へ参りましたのは、初めはシナでありましたが、次には第一次大戦中アメリカ及び英国の方に参つたんであります。ちよつと英国の方に在勤しております際に、向田海軍少佐——でしたかな、山岡さんの女婿の方がお見えになりました。山岡さんから手紙を持っていらして御紹介をいただいたのであります。そこで私は向田さんにいろいろどういふ御奉公したらいですか、どういふお世話しましょうかという話でありまして、いろいろと向田さんの注文を得まして、向田さんの御希望なさるような御接待をしたのであります。ところが日本に帰つて参りますと、山岡さんは「いや、向田がいろいろお世話になつたそうだが、委細は本人から聞いておる、君もいろいろ夜昼勉強したそうだな」というような話で、どうも恐縮していいのかどうかさっぱり見当つかんよう。初めて私は山岡さんはすいとも甘いも、夜も昼も、明暗とも御承知の方ということとを、親しくその際に経験したのであります。

さて、大正八年くらいでありましたか、日本へ帰りまして、その当時の商船会社を見ますというところ、おそらくは大阪商船の約七十何カ年

の歴史のうちで、その当が最も大阪商船の盛大な絶頂であったと私は思うんであります。当時は申すまでもなく、この大阪には大阪商船王国というもんが、(新聞社はそう書いておりますから。)大阪商船閣というもんが盛大であったのであります。この中心になりますところがある中橋さんであり、それを補佐する山岡さんであり、さらにこれと一緒に仕事された堀啓次郎さんであったのであります。この三人の役者が大阪商船をして、大阪財界の全部に対して翼を伸ばして、大阪商船閣といい、あるいは新聞、雑誌記者は大阪商船王国というような、今から考えると、実に、絢爛たる時代を形成されておったんであります。私はその当時のことを追懐しますというと、非常に商船会社というものをなつかしく感ずるのであります。私は不幸にして第二次戦争後に大阪商船をやめまして、目下の大阪商船の形は実にさみしいものを感じるのであります。ことほどさように、約二十何年前の大阪商船閣の盛んであった時代を追懐するんであります。その閣の中心は何と申しましても、表面は中橋さんであり、堀さんでありましたにかかわりませず、先ほどお話がありましたように、潤滑油として山岡さんが活躍され、しかもあるいは商工会議所会頭をおやりになり、あるいは大阪鉄工所をおやりになり、ないしは日本電力を創設され、至るところ商船会社以外の方面において活躍されましたことは、山岡さんにほかならんのであります。私はこまかいことはよく存じませんが、その近辺に奉仕しました結果、いろいろのことを間接に教わったのであります。それが私今日に至るまで生きた教訓だし、生きた先生として、山岡さんをいまだに追慕しておるのであります。

まあ今日はからずも岸田さんなり、また山岡さんの御遺族の招待に

よりましてこの席に列する光栄を得まして、人から一倍なつかしく感ずるのは、山岡さんというものは、実に商船会社としてもえらい人であった、また大阪の全財界から見ても一頭抜き出た人であった、おそらくは東京方面においてもそう類がないのではないか、いろいろのいわゆる梟雄というような型の人は東京にもあるようでありますが、実意のこもった、しかも忠実なる実業家というものは、おそらくは過去現在、将来はわかりませんが、過去現在を通じて山岡さんが第一人者でないかということをお私に痛感するのであります。

今日はまことにありがとうございます。この機会におきまして、私も深く深く山岡さんの御遺徳を偲ばさせていただきます。ありがとうございます。ありがとうございました。(拍手)

信 藤 孝 三 氏

(拍手) 私、日立造船の信藤でございます。実は私、当時の大阪鉄工所に入社いたしましたのが大正六年でございます。今からちょうど四十年余り前でございます。ちょうど山岡先生が大阪商船の副社長に就任なさいますと、私どもの会社の社長を御辞任になって、取締役会長をおやりになっておる当時でございます。ただいま飯島先生から、「ちょうど富士の白い雪を尊く、美しく仰いでおる、さながら仰いでるようなものだ」とおっしゃいましたが、飯島先生がそうでございますましたら、私などは地の上から人工衛星を仰ぐとでも申しますか、それほど遠い存在でございます。それからずっと相談役に御就任になりますまで大正十五年ごろまで会長でいらしたと思うのでございます

が、ときどきお目にかかることはございました。また一言一言お言葉をいただくこともございますんですが、ただ私どもは最敬礼するだけでございました、何ら先生についてお話し上げることはないのでございます。ただ私、いまだに非常に尊敬し、お慕い申しておりますのは、この大阪鉄工所の株式組織になりました初代の社長でいらせられて、さっそく桜島工場、因島工場の大拡張工事を計画なさいまして、私が入りました大正六年には、すでに桜島のただいまの大きなドックが完成いたしておりますし、その後次々と機械工場その他も完成いたします。また因島の工場も大拡張をなさいまして、第一次欧州大戦当時、その当時の大阪鉄工所は、すでに大正五年、六年ごろは、商船の建造量におきましては、実は日本一であったのでございます。そういう点で私どもあとに続くものが先生の御遺徳を慕っておる次第でございます。

それから長らく、先生が会社をお去りになりましたから関係ございませんでした。これは御家庭のことを申し上げては大へん恐縮なんでございますが、実は来年大学を出られます、今御紹介者のお話もございました御令孫の順さんでございますが、明春大学をめでたく御卒業になりますと、私どもの方の会社に御入社いただくことになっておるのでございます。三十数年ぶりに山岡家と、その創設されました会社との関係が再び生ずるということを、私ども大へんうれしく存ずる次第でございます。

なおただいま私どもの会社に社是というふうなものがございまして、これを額などに入れて、各事業所ごと日々拳々服膺しておるのでございますが、はからずも私昨年会社の個人経営のときから通算いた

しまして、創立七十五周年になりました、七十五年史を編纂されたのでございますが、それを見てもみますと、山岡先生が、大正三年におきまして株式組織になりましたときに、従業員一同に与えられました訓辞がございます。それが私のころは追憶が間違っておるかもしれませんが、その御訓辞をちょうど煮つめたようなものになっておりまして、私ども今多くの従業員には、これを日々拳々服膺しておるのでございまして、いまだに日立造船には山岡先生の精神が残っておりまして存じておる次第でございます。大へん失礼いたしました。(拍手)

森 寿五郎氏

(拍手) 私はせっかく指名せられました。いろいろ考えてみましても、どうも頭に浮んでこないのがあります。御承知のように私はただいま関西電力に勤めておるんですが、御承知のように日本電力ができましたのは大正八年でありまして、私もちょうどそのときに学校を出まして会社に入った。山岡さんは初代の社長であられまして、私どもと社長との間はちょうど月とスッポンぐらいの差がありまして、直接お話をする機会ももちろんなかったのであります。お目にかかってお話をしたということは、思い出してもどうも一ぺんぐらいしかないのじゃないかと思うのでありますが、ちょうどそのとき私はアメリカへ用事があつて参りまして、帰りましたら廊下で会いまして、おじぎをしましてごあいさつ申し上げましたら、「ああ、行って来たか」という程度の話でありまして、そのあとは直接お話を承わったことも何もないと思うのでありますが、いろいろ考えてみますと、いつ

ごろでありましたか、夏でありましたが、白扇に山岡さんが書かれた大へんりっぱな字で、「電源あれば産業あり」といったような字を書かれておった扇子を思い出しますのであります。

それと同時に先ほど飯島さんがお話になりました黒部で四十万を開発するのだということでありまして、私はその当時はそれは知らなかったのですが、ちょうど昭和三年でありましたが、黒部川の下流のところにあります柳河原という五万四千KWの発電所を、山岡さんが御在世のときに作られたのであります。黒部は御承知のように宇奈月が起点になっております。あそこは温泉郷でありまして、山岡さんは黒部を非常に好いておられたと思うのであります。と申しますのは、あそこに独楽荘という山岡さんの別荘があります。その碑はどなたが書かれたのか知りませんが、「司馬温公の故事にならい」云々といったような文句を書かれた記念碑の裏に文句がありますが、その独楽荘が当時は栗の木で囲まれていて、どこから見えないような非常に幽すいな、ところであったのであります。それがちょうど昭和二十二年に宇奈月の町が全部焼けてしまつたような火事がありました。この火事のために栗の木が火にあぶられましてすっかり枯れてしまいました。現在ではむき出しになっております。記念碑も同様に町の方からよく見えるようになっておりますが、そういうことなことで、山岡さんは、黒部を非常に愛好されておったと思うのであります。ということとは、結局あの川筋を開発しようという念願から出たものだと思いますのであります。先ほど申しましたように、私は関西電力にただいま奉職しておりますが、御承知のようにちょうど黒部の第四水力発電所というのを今建設中でありまして、黒部の川は下流から次第に開

発して参りました。現在では黒部第二、第三というのがございます。合計しますと約二十四、五万あるのであります。黒部第四と申しますのは、これはその当時からそういう計画はしてあったと思うのであります。これは、一番の上流に大きな堰堤を作つて水を貯めて、そしてこの水を渇水するときでも下へ流して、そして出力を平均して使うと、こういう計画は、当時できておつたんであると思います。それが日本電力が日本発送電になり、現在関西電力になっておるのであります。いわば山岡さんの衣鉢を継いでわれわれは黒部第四の開発をやつておるということになると思うのであります。これは大体一億といふ、先ほどの飯島さんのお話のような一億どころの騒ぎじゃないのであります。第四だけでも四百億円かかるのであります。しかもそう相当長期にわたつてやつと完成するのであります。昨年からは開発にかかりました。昭和三十五年に一部分発電するようになりました。昭和三十六年、昭和三十七年にやつと最後の二十五万KWができる、こういうふうのできるのであります。そういういたしますと、これにかねがね岸田さんからよく伺つておるんであります。黒部の川筋をずっと上へ上りまして、そして行き方によつては、それが立山の上を越して称名の奥に出てくる道と、それから一つは信州の大町に出る道ができることになるのであります。観光から申しまして、それからまたは電源の方から申しまして、山岡さんの御意思を継いでわれわれはこの仕事を今実はやつておるのである、こういうふうを考えてもいいのじゃないかと思うのです。山岡さんの霊も地下に眠せられているのじゃないかと思ひます。簡単であります。……(拍手)

太田 丙子郎氏

(拍手) 私は太田丙子郎でございます。

商船会社に長いことおったので、先ほどの話のうちの商船かぶれをしているかもしれないのですが、なるべく簡単に、一言二言で皆さんの邪魔をせんようにして申し上げたい。

私は山岡先生に会ったのが明治三十三年一月で、東京で会ったのであります。それは中橋社長が私を採用するということを学校に言うて来たので行きまして、中橋さんに、私のことだからむき出しにものを言うたんです。「実は私は商船学校の大成丸―練習船に乗り組みを命ぜられておるんだ、しかし月給が高いところがあればどこか行きたいと思っていたんだ、それより前、その前年に中橋さんが横須賀においてになって、そうして私どもを集めて、「こういうわけで大阪商船は発展しようと思うのだからして、お前たち来て入社しろ、」こういう話があったので、その約束を思つて中橋さんとこへお伺いしたんです。ところが言うことが少し欲張つたつもりはない。商船学校の練習船に乗ればこれこれもらえるんだ、商船に行つたら何ほもらえるのだ、こう言つたところが、「それはあまり欲張つちやいかんぞ」ということを中橋社長が言われて、「そんなことはとにかくいわずにしても、文書課長の山岡順太郎という人がこういうところに泊っているからそこへ行つてみて、」それでお伺いして、そうして、今の中橋社長に話したようなことを申し上げたところが、にこにこつと笑つて、そして「まあとにかく大阪へ来たまえ」こういうことなんです。まあそういうふうなわけで三十三年の一月の末に大阪へ初めて来ました。そうして会社に

きましたところが、何と言うかと思つたところが、そのころの海運の人事をしておつた人から「四等四級社員に採用し、三等俸を支給す」と、こう言うんです。何のことだかちよつともわからんです。愚鈍のせいもあるのです、もう一つ念を押しに課長さんに聞いたところが、これはこうこうなんだ、というので、まあ大体こら辺のところかなと思つて会社へ入つたんです。

そういうふうで入つたのであるからして、私はわがままもんだということにまあ通つておつたのであります。しかしそうこうしているうちに船に乗り、いろいろな経歴を経て今度は陸にあがつて仕事をするようになりました。そうしていると、ちよつと内航部というものが出て、内航部長に山岡さんがなつて、私どもはその下にいつて仕事をするようになった、非常になごやかによく指導してもらつた、叱るときは叱るし、褒めるときは褒める、こういうことであつたのであります。幸か不幸かそのうちに、とかくいうより私には運が来たんだと思つたのは、山岡さんがヨーロッパに行くからして、お前はカバンを持って行けというので、カバン持ちを仰せつかつて歩いて歩いたんです。それからちよつと大正二年の七月十九日に出て、そして浦塩まで船に乗つて、シベリヤの鉄道に乗つて行つた。毎日々々つまらない山を見て行くんだが、いろいろな食欲が出てくる、何か食べたい、何か飲みたい、そう言うけれども、先生は決してものを、こういうものをして欲しい、ああいうものが欲しいとおっしゃられませんので、そのままにしておつて、私は何かの都合で席をはなれたところで、帰ってくるという、山岡さんがジュースのビンを持ってコップにジュースを注ぎながら飲んでおるじゃありませんか。「ああ、いいものを見つけまし

たな」と、こう言ったところが、「君よりは僕の方がロシヤ語が上手だから、という証拠はこの通りなんだ」と、こういうわけなんです。「どうも相すみませんでした」とそこであやまったわけなんだが、まず叱られたのは、私一生のうちに山岡さんに仕えてはそれが一つでありますが、常にやはりだいぶんこの男、役に立たん男だなと見ながらも、四ヶ月間の間、あまりひどい小言も食らわずに旅行したのであります。そしてニューヨークで、私はそのころ建設中であつたパナマカナルを視察して帰れ先生はほかの人があるからして、お前がついてなくともよろしい……まあていよく追い出されたのかもしれないが、とにかく自分は満足して向うを旅行しておつたんでありますが、その別れの晩に、先生は非常にしんみりとして、「どうもお前一人で旅行できるかな、気の毒だな」と思うような表情をしてその晩に別れたんでありますが、そういうふうには、大へんにつまらない私のような者さえも、あの心構えをもってそうしてかばつて下さるということを私はしみじみ感じたのであります。

それからまあ、そういうふうにして私はこういう何か礼儀を知らない野人でありますから、長い間いろいろないきさつがあつて、指導を受けておつたんだが、常に私のような者でもその先生の徳に感じて、そうして今でも思ひ出すことがたくさんあるのであります。申し上げますとそういうふうには私は長い間ほとんど直接に仕事をしておつて、しかも海の仕事を主にしていたために、いろいろな考えの違つたこと、境遇の違つたことがあるので、いきさつはいろいろありますけれども、実にやわらかな抱擁力をもって接して下さつた、それが先ほどから皆さんがおっしゃられる大へんなる美風なんじゃないかと思う

のであります。この機会におきまして、申し上げるべきことはたくさんありますけれども、あまりお妨げしても相すみませんから、この辺で失礼させていただきます。どうもありがとうございます。(拍手)

高津 啓 一氏

(拍手) 先刻から大先輩の方からいろいろの思ひ出やら逸話が出ましたので、もう私から申し上げることは何にもございませんのですが、ただ一つ二つ私が山岡先生に比較的側近の仕事をしていただいております。関係上、二、三自分の思ひ出を申し上げます、簡単に切り上げさせていただきます。

山岡さんが晩年に手がけられました最も大きい事業といたしましては、何を申ししても日本電力の創立事業だつたと思つてあります。これが大正八年に会社が創立されまして、創立と同時に私は入社をいたしました。その後仕事の関係上秘書課長の職務を長らくいたしております。従いましてその当時の山岡社長に接近する機会が比較的多かつたのですが、先ほどからだんだん出ておりますお話は、非常に茫洋とした方というお話が多々出ましたんですが、飯島さんが先ほど、「非常に茫洋としておられてしかも非常に細心だつた」というお話が出ましたんで、私もそれを体験いたしましたお話の一つ申し上げたいと思つてあります。私が、秘書課長の仕事としましては、稟議書の書類をまとめまして、そうして山岡社長の決裁を受けるという仕事、秘書課長の仕事の一つであつたのでありますが、大へんお忙しい方でありました関係もありませんのですが、その稟議書を社長室へ持

って伺いますと、ポケットからあの見なれました珊瑚樹の大きい判口をひよいと出されまして、「おい捺してつてくれ」というて判をポンとほり出されまして、それでそのそばで私とその稟議書に社長の決判を次々と何十という書類を捺すんでありますが、どういふ件名の稟議があるかとも、それを見せいと、そういうようなことは一言もお尋ねにならないのでありまして、そうしてその書類は社長決裁でどんどん下っていく、そういう日が続いておるかと思ふと、二カ月目に一ぺんぐらいその机の上の書類を隅から隅まで実に克明にござんになるのでありまして、そうしてその書類上の疑問の点がありますと、実にこまかい点まで一々その責任者を次々に呼び出して、非常な綿密な書類の調査をされて、そして御意見があるのであります。そうしてそれが済みますという、また翌日から私が社長代行の判口をどんどん捺して書類を返すというので、私がいつかそのことをお尋ねしましたら、「これは高津君、これが社長学の一つだからよう覚えておけ、社長というものは毎日非常に多忙なもので、そして一々書類を隅から隅まで見るといふことはどんな精力家でもできるもんじゃない、こうして二カ月に一ぺんぐらい大掃除をしておくという、大体一ぺんそれで目を通して注意をしとくと、あと二カ月ぐらいはもう間違いのない書類が出てくるもんだ、だからその間は君、見なくてもいいんだよ」こういうようなことを言われたことを覚えております。そういうような点は、先ほど飯島さんがお話になりました非常におおまかで、しかも細心でとおっしゃるそのお話の通りのように私も思うのであります。

それから非常に物事の判断、決断と申しますか、そういう点はどう実上天才的な頭を持っておられる方でありまして、山岡さんの社長当

時に池尾さんが専務をしておられましたんですが、池尾さんは、御承知の方も多いと思いますが、相当頭脳も明敏な緻密な人でありましたのですべて物事を論理的に考えて結論を出すのが非常な慎重なものの判断をされる人ではありますが、その池尾さんがあるときに、この間、こういう問題について、自分は非常に苦心をして、実はもう二晩も三晩もほとんど寝ずに問題の結論を考えて、そしてやっと結論が出たので山岡さんのお宅へ行って、そしてその事の成り行きと、それに対する自分の判断というものを申し上げたところが、「その道行きの話は、これは聞かんでもいい、しかしその問題は結論はこうしたらいいだろう」ということを率直に言われたのがその池尾さんが二、三日寝ずに考えた結果とまさにびつたりと一致した結論を出された、それで、「あの方の物事の見通しという力は実にどうも驚くべきものだ」ということを池尾さんが話をされたことがあるのであります。そのようにあの方は、ふだん私ども接近しております、道行きの話というものはほとんど耳をかされん人でありまして、ただその問題の結論だけが非常にはっきりと答えがすぐに出る、そういう偉大な頭脳の持ち主であられたということ、感心して日ごろ見ておったのであります、いろいろ晩年三カ年ほど病気のためお引きこもりもして、毎週私ども役員柄お宅へ伺いまして、いろんなお話も伺いましたのですが、こういう席上で申し上げる話よりも、いろいろまたくつるいだとところで申し上げる話ばかり多うございまして、ここで申し上げる話はまあこの程度で終らしていただきたいと思うのであります。

先ほど森さんも黒部の発電事業の話がされましたんですが、その電気事業のことにつきましても、いつか私が黒部へお伴をして帰りかけ

の汽車の中で、「ここで起きた電気を百数十マイルも二百マイルも送電線というものを引っ張って、そうして大阪へ持つていくということは、これはどうも先ではこういう送電線なんてなものを作らんでも、ここでできた電気がそのままつと大阪で使える、そういうような世の中に君なるよ、送電線なんかは要らんものになるだろう」というような話を帰りの汽車の中でされたことがあります、今ちょうど思い合せますと、このごろのいろいろ無線電波の関係なんその発達を考えますと、やはりその線のない電気が送られるというようなことを思い合せまして、そのとき山岡さんはどういうつもりでそういうことを言われましたか、一つの冗談ですか、その辺はわかりませんが、ともかくそういうことを、今考えますとほんとうに線のない電気がいくんだというようなことを、ほんとうにその先のことを考えて言われたんじゃないかというような気がいたしますんでございます。

いろいろ思い出のことは尽きませんが、最後といたしまして簡単にこれでごめんをこうむらしていただきます。(拍手)

谷口直之氏

(拍手) 先刻来、山岡先生の思い出につきまして、いろんな方面からのお話も出ておりましたが、私はここに何ら申し上げることもないと思っておりますが、少し変わった方面から山岡先生を私はお便で申す次第であります。私が山岡先生にお目にかかりましたが、明治と申しますと、だいぶ古い話であります。たしか三十九年だと存じますが、商業会議所の法橋善作氏の紹介を受けて初めてお目にかか

ったのであります。そのときの私を感じまする事柄は、あの御英姿が今なお私の目のあたりに映るのであります。初めてお目にかかったときは、実にこわい人であるということの第一の印象を受けたんであります。それは山岡先生の御容貌によつて私はそう感じを受けたんであります。後しばしばお目にかかりまして、いろいろ御指導を賜わつたのであります。時あたかも四十五年かと存じますが、ちよつと年数は記憶をいたしかねておりますが、大阪の市政が非常に乱脈と申しますか、いろんな党派の関係でござたしておる際に、市民の世論によりまして、中橋先生が市会議長に迎えられる後でございまして、衆議院議員の総選挙がありました。そのときに初めて中橋先生を議政壇上に送る、これをすなわち理想選挙として壇上に送りたいというのは、当時私はそういう新聞に関係しておりましたために、記者連中に理想選挙を行おうじゃないか、こういう話がたまたま起りまして、幸い私は商船会社に対しておる交通関係の新聞に携わつておりましたので、まずもつて中橋社長に私が話をいたしまして、こういうことが新聞記者連中に起つておるが、ひとつお受けを願いたい、こういうことを申し上げたところが「冗談言うな、おれはそんな考え少しもないよ」というで一撃のもとみ蹴られました。ところが一方ではぜひこれはひとつ将来のためにも、こういうりつぱな人を理想選挙で送りたい、そういう熱望が燃えあがつて参りました。そこで山岡先生にまずもつて御快諾願うようにという際にも、山岡先生に、「君ら若い者がそんなことを言うたところが、本人さんの意思はそういうことは毛頭ないんだあるから、そういうことはやめろ」こういうことでありましたが、一たび思い立ったというたら、国家社会のためにもどうしてもこうい

う人を差し出さなければならんというのが一般の記者諸君の声が高まったものですから、再三私は山岡先生にぜひ何とか御承諾を願うようにと言って参りましても、やはりお受けにならん、こうなればわれわれも、ここまでできたのであるからぜひやろうじゃないかというので、当時大阪ホテルでそういう記者連の集まりから、再々会合いたしまするにも経費がかかる、こういうために選挙違反ということも考えなきゃならんというので、その当時ライスカレーが一ぱい十五銭と、こういうように私は記憶しておるんです。それを食事にいたしましたいろいろな協議いたしました結果、これはだひひとつ南海の社長の大塚氏に一応持つていこうかというので、大塚に話をいたしました、大塚氏がよく動く動いていただきました、中橋社長に話していただいたところがやはり同じことであります。今度はまた山岡先生に持つていつて、ここまで熱意を持つてやっているから何とかして社内にもその動きをして欲しいということを言われまして、なかなかお受けを願うことができなかったであります。その当時富島組に井上虎治という人があったので、そういう方面からあらゆる手を尽して、ようやく御受け願った、然し本人はむろんそういうことには関与されません。私どもがここまでやったのであるからぜひこれは当選せしめなければいけない、こういうので、まあ決意を固められたのであります。

その間に二、三きわめておもしろい話がありました。当時演説会場を設けるのに、大阪に数十カ所設けました際に、今のような自動車が あるわけでもありません。ようやく人力というものであります、その際に弁士で、京大におられました市村光恵という法学博士の先生であります。この人を迎えますして、私はそのとき総務委員長をしており

ました、そしてシーバーをかけて弁士の配置をやりました際に、市村先生は「俺は小使いに来たんじゃないから」というてひどく叱られたこともありました、その終りましたときに「さあ、きょうはこれで済んだから、俺はこれから宗右工門町へ行くから」「しかし先生、選挙中でももしも誤解をされては非常に困りますから、」「俺のふところで行くんだ、選挙法違反にならんじゃないか、」「こういう一言を伺いまして、先生はそれで出られたのであります。そのことについて翌日山岡さんに、「先生にああいうふうに申し上げたんですが、」「まあそういうことなら先生は法律家だからいいじゃないか」こういうことでまあ済んだのであります。

いま一つは、西浜町―皆さんも御承知だろうと思えますが、そこへ行きまして、昼会場に行きましたところが、聴衆がただ一人、巡查が二、三人警戒しております。弁士が私のよく知っている木原という人でやはり山岡さん、中橋さんのごとく頬にひげをはやしたりっぱな風格の弁士でありました。機転をきかして仏法の話を始めました。ところがその仏法の話ということについて、一人、二人の老人が、おられました、「ちょっと待ってくれ、と飛び出されし町中を歩いて呼びかけてきたんです。お大師さんの話ということで、直ちに七、八十人がまあ寄り集まってきた、その際に山岡先生に、きのうこうおもしろいことがあったという話をしたところが、「なかなかおもしろいやり方やな、まあ成功だろう」と、こういうことであります。

こういうようにしてしばしば先生の英姿に接して、山岡さんという方は、非常に私は当初こわい人だという一つの観念を受けましたが、日を追うに従って、だんだん人情味の深き、実に抱擁力の

あるりっぱな方である、一方の中橋先生は、山岡さんに反した小柄の方でありましたが、いわゆる抱擁力もあり、また智者であったと申しますか、とにかくこのお二方によってこの商船会社を經營される上においては、実に将来大なるものがあるのじゃないか、またこの御両氏によって指導を受けられる前途ある社員各位も、続いて大成せられるものじゃ、こういうことを当時想像いたしました。後今日になりますれば、やはり大臣にもなられた方数人あり、あるいは政界の重鎮になられた方、幾多のりっぱな方々をおつくりになっておるということを考えますと、いかにこの両先生が抱擁力があり、腹のある人だ、人は「腹」にあるということを考えますれば、その当時の私の思いがまさに実現したのじゃないか、こういうように考えまして、先ほど来から写真をじつと拝見しておりますと、まことに胸に迫る思いをいたしましたわけでございますが、今日の三十年祭に際して岸田さんから御案内を受けまして、非常に私は感銘深く、ありがたく、今日末席をけがした次第であります。はなはだ等閑でございますが。(拍手)

浜 地 藤太郎 氏

(拍手) 私はご指名にあずかりました浜地藤太郎と申しまして、耳鼻咽喉科の町医者でございます。

山岡先生は大恩人として、絶えず脳裏にきざんでおります一人でございます。今まで承わりますお話は、大部分御事業の上のことが多いようにございますが、私はそういう方の関係ではなく、全く私事をちよつと申し上げて、先生の御遺徳を偲ぶ一助にしたいと思っております。

私が大阪で開業いたしましたのは明治四十一年でございますので、まあことしが数え年五十年になります。が、今家内にしております者の母親の紹介でお宅に伺いまして、いろいろ御教訓を受けておりました。大正二年に家内を迎えますときに、先生御夫婦が仲人をして下さいました。それで茶臼山の「榎作」と申します料亭で結婚式をあげまして、以来一そう先生を慕って、機会さえあればお伺いして、皆様御承知の偉大なる御人格に接しては自分の教訓にしておりましたのでございます。そんな次第で、まあ全く医者になったというだけで、何も研究も何もしておりません私が、どうかこうか今日まで自分の仕事を続け得るということは、やはりそこに山岡先生も偉大な感化があったものだと始終思っておりますのでございますが、これは私事でございますが、私がふとしたことからいろいろ理想といえませんが、夢を描いて、ただいま関西女子医科大学として存在しております、前身は大阪女子医専と申しまして、私が微力を顧みず設立したのでございます。東京には女子の医事機関がございましたけれども、東京以外にはないものがございますから、関西地方から東京まで行くことがずいぶん女子にとっては苦痛だろうと思ひまして、ちよつとしたことからああいうことを始めました。ところがまだ社会的の地位もございませぬし、なかなか文部省に私どもが出願したつて許さないと云うふうな情報もありましたので、山岡先生をお頼みして設立者になっていただいた。ですから山岡先生が今の関西女子医大の設立者でございます。私が理事長として經營をしておりますが、微力なるがゆえに満二年ではかの方にお譲りせなきやならんことになりました、そのときはちよつど先生も物故されましたあとでございましたので、直接おわびはできなかつ

たのですが、今この機会に、天に安らかにお休みになっております先生の霊に対しておわびをしようと思ひまして皆様に直接の関係はないことですが、自分が追憶の情にかられてこんなことまで申すわけでございます。それも、先生においては私の微力も知っておられますし、何もかも見抜いていらっしやいましたことはもう間違いないでございますが、まあ若い者がそうやって言うんだから、お前のいいようにせいというような実に寛大な御処置であつたものだと思います、しかし私自身はそのころから離れてしまいましたけれども、現在そうやって大阪における唯一の女子の医事機関として残っておりますということは、山岡先生の御遺徳の一つであろうと思ひますので、おわびをかねて、皆様にちよつと私の感懐の一部を申し上げますわけでございます。

いろいろありがとうございます。(拍手)

山 岡 康

(拍手) 私、山岡順太郎の長男の倭のそのまた長男の山岡康でございます。現在、今夜御出席願ひました和田薫社長のところの京阪神急行へ行つとります。さつき岸田の伯父がちよつと触れたんでございますが、祖父には二人の娘と三人の息子がございましたが、今ほんとうにもう岸田の伯母だけしか残っておりません。孫は割にたくさんございまして、さつきから進行しております岸田の長男の幸一さん初め、後にはいぶん居るのでございますが、そういう系統の関係で、私が孫を代表いたしましたして、追憶をかねまして御礼申し上げたいと思ひます。

と申しましても、祖父がなくなりましたのは私が五つのときでございまして、結局五年間しか接してないわけなんです。しかも当時祖父は天王寺の松崎町というところにおりまして、私どもは苗代田に別居しております、ときどきおやじなんかに連れて行かれまして、天王寺のうちに行つたことを記憶しているんですが、ほとんどもう記憶がないのであります。ただ非常に強烈にまあ残つておる思い出と申し上げますと、孫がたくさんおりましたので、当時もう祖父は病気でございまして、ふとんの上に寝ておりまして、順番に孫を自分の膝に抱きあげまして頬ずりをするのでございます。そうすると御存じのように大へんなひげづらでございまして子供心に非常に痛かつたのでございます。(笑声)で、今の言葉で言いますと、そういうふうな霧囲気になってきますと、私はしょっちゅうエスケープといひますかね、それをやっておつたのでございますが、しよう事なしにひつつかまえられることがある、そうすると、それが痛くて痛くてしょうがなかつたのでございますが、それがもう私のたつた一つの思い出でございます。私、まだ若輩でございまして、偉大であつたと言われる、もうほんとうに偉大であつたと言われるだけしか私にはわからないのでございますが、まあ祖父の血を受けているものといはしまして、今後この頬に痛かつた頬ずりのあとだけを、祖父が残しました唯一の慈愛といえは何でございまして、それを心の励みといたしまして精進していきたいと思ひます。

本日は皆様お忙しいところをようこそ来ていただきましてありがとうございます。孫を代表いたしましたしてお礼申し上げます。……(拍手)

追憶会のあと特に齊藤孝二郎、高村庄太郎

両氏から次の文を戴きました。

齊藤 孝二郎氏

私は土木の技師として大正九年の二月に日本電力に採用せられましたが、僅か週日の後、富山県に創立せられた子会社越中電力の土木課長にやられ大正十三年に『帰り新参』として又日本電力へ帰ってきましたが、山岡社長の長逝せられます迄この間八カ年御厄介に相成った次第で御座います、尤も土木の技師などと申すものは事務系統と違い、日常社長にお目にかかる様な事はめったにないもので私も其範圍を出ませんが然し私は比較的御因縁があつたのではないかと存じて居ります。其れは此子会社の社長が商船会社の台湾の支店長から転任して来られた白荘司芳之助さんであり、専務が又商船会社高松の出張所長をしておられた三井水忠さんであつたからで此お二人とも勿論山岡さん直系の方々であり特に白荘司さんなどはお若い頃からの御関係でよく山岡さんのお話を伺つたものであります。それと私が日電へ帰つて程なく黒部の建設所長を命ぜられ約三年許り宇奈月に在勤していました頃例の独楽荘をお造りになつて山岡社長はここへ静養にお越しに成つたのであります、そんなら時々御伺ひしたのかと申すと左にあらうで黒部には建設所長の外に事務系統の出張所がありましたので御用は大の方其出張所でやつて私は殆んど伺つた事ありませんでした。ところが白荘司さんなんか自分で独楽荘へ伺うのがオツクウなもんですから私の家内に「奥さん誠に申しかねますが一寸私の使いをして下さら

んですか」などと云われ却て家内の方が何う機会がありました。其んな折には山岡社長は寢床の上に座つてよく手紙を書いておられた、巻紙を手を持って大きな字を書き連ね乍ら『よく来たネ一寸待つておくれよ、今すぐ書き了るからネ』『サア片付いた』と言う様な応待ぶりであり、真にお氣安かつた由であります。

斯様な訳で私が大阪の本社へ転任に成つてからも宇奈月の因縁もあり家内が時々天王寺の御宅へお伺いしますと、奥様が一向なりふりかまわずすぐにあの薄暗い大きな応接間に出て来られ黒縹子の帯もだらりと締められあの大きなお身体の胸をほたけて出て来られ『遠いところを良くお出で下さつたサア、暑かつたでしよう暑かつたでしよう』と言われて団扇でバタ／＼とあをつて下さる、と申す様な話を家内から聞かされますと私もついお親しい感じを持つたものであります。

只今私はフトした仕事の関係で信州大町市に在る関西電力の黒部建設所に常駐致しておりますが此れは一つは私が三十幾年前から黒部川の水力発電工事に従事させられた事が素因と成つておるのであります。そして身近かにアルプス連峰の一つ赤沢岳の中復をブチ抜いて黒部川の上流に出来るダムサイトに直接通ずるトンネルを貫通せしむる工事に關係致しておりますのであります。私が昔宇奈月に在勤致しておりました大正から昭和初年の頃は黒部川沿いの電車も僅かに最下流の柳河原発電所取水口迄即ち宇奈月から約一キロ内外しか出来上つておらず其奥は人跡未踏、険峻其者の所謂黒部神秘境谷でありまして到底た易くは人を寄せつけない兩岸削立せる溪谷でありました。然るに只今では第二発電所の区域を通り過ぎて第三発電所の取水口即ち仙人谷まで夙に電車軌道が出来上り、と申すよりも寧ろ私共が主として此れを

担任せしめられたのでありますが、自來年を経て今度関西電力で建設中の黒部第四発電所が完成致します頃には茲数年を待たずして此軌道は空中索道やらイングラインを中継として黒四の取水口堰堤の出来る御前沢迄の自動車墜道に連絡し、一方信州大町から約二〇キロに及ぶ専用道路もアルプス連峰の中腹をブチ貫いて黒部川筋の道路と連絡致します、此れに依つて発電所建設の附帯設備である此道路は北陸線の黒部市から黒部川を遡り、主として電車自動車により数時間にして信州へ相通ずる事と相成る次第で将来は必然的に觀光路線としても画期的の境地を踏出する駅であり、斯様なルートは昔日には到底夢想だもせざりしところでありました。話は又昔に戻りますが昭和三年の初夏であつたと想いますが某日山岡社長が何か御用命ありとの事で私はあるの大ビル七階西北隅の社長室に入つて行きました。ところが『あの黒部川の専用電車をズット奥まで延長して信州へ抜ける計画は出来ないか、……俺は此れを寧ろ自分の仕事とし度いのだが……』云々との御質問である、私は突嗟に何んと云う無鉄砲な事を云われるものかなと思つた、そして『黒部川はあの險峻そのものの峡谷であり加うるに両側は一万余級の絶壁削立せる峻峰に囲まれ軌道を延長して信州へ抜けるなどと左様な道路は到底出来るものではありません』とお答へしたのであります。

あれから三十幾年、私は今自ら不可能と考へていた此仕事に直接たづさわつて居るのであります、そして今日三十周年の追憶会に御招待を蒙つてあの昔の觀なれた山岡社長の御写真を久振りに仰ぎ見て居りますと『俺の言つた通り実現したネ』と微笑しておられるのがありくと想ひ浮んで参ります。

尚関西大学の御話を先程此席で拝聴致しましたが私も故社長に呼ばれて大学のグラウンド造築設計を命ぜられ測量其他の準備に倭サンと同道、幾度か千里山に通つた事もあります、三十年の歲月はどの御遺業も其れれ成育を遂げ就中御一家益々御繁栄の御様子を目のあたり拝見して御追憶会であり乍ら御慶びを申上度気持で一杯で御座います。

高村 庄太郎氏

山岡順太郎さんの晩年、御病気の事で岸田幸雄さんや亡き首藤守彦君から御相談を受けて常磐通りの御宅に伺つたのは亡くなられる二三年前であつた。喘息でお困りのやうな御話であつたが、お目にかかつて御話を承つておる間に尿毒症特有な呼吸の型が認められたので、翌日検尿したところが明かに慢性の腎臓炎のことが判つた、そこでその日から御手当を始めたわけであつた。幸にしてかなりひどかつた呼吸困難やせきもおさまつたのでひと安心をしたのであつた。そのあと引きつづきお目にかかり宇奈月で静養して居られた間にも再三独楽荘に御邪魔をしたのであつた。日本電力の開発に全力を尽されて居られた時代であつたろうが余程宇奈月は氣に入つたやうであつた。

追憶懇談会の席上で皆様がひとしく故人が茫洋たる風ぼうの一面しつかりした御考を持つておられたことを述べられたが、親しくお目にかかつておると特にその感を深くしたのであつた。当時商船界、電力界の大先達であつたので翁の御病気の事を聞き伝え内地はもとより海外の友人故旧から数多くの喘息や腎臓にきく薬や漢薬などが寄贈されたものであつた。翁は奥様と共に一々鄭寧に硝子戸棚に整理保存され

てその厚意を喜び示された、それ等の中から人參とか可首烏などを調合してすすめたこともあった。

身近にお目にかかった関係上こわいと思ったことはなく却て懐の広い大きな人物と云う感が深いのである。この度三十年追憶の集まりがこんなに賑かに行われたことは全く故翁の偉かったことを示し人徳の高かったことを今更に偲ぶ次第である。

某月某日

岸田幸雄

(昭和三十二年十二月十八日、日本経済新聞「某月某日」欄より転載)

きょうは岳父山岡順太郎が物故してから三十年目になるので旧知各位の参会を得て故人追懐の小集を催すことになって大阪クラブへ出かけた。この会場も故人生前のゆかりの場所で、四階の大ホール正面には故人の遺影がかけられ、季節の生花で飾られた写真に久しぶりで見参する。

来会者八十余名、東西財界の諸名士も出席された。牧野良三氏や米寿の武藤岐阜県知事、杉会頭さては飯島幡司氏等の追懐談は参会者に深い感銘を与えた。大阪商船、日立造船や関西電力、いずれも故人の多彩な事業的活動につながりが深かった。いま工事中の黒部川第四水力発電所の水利権も、故人が日本電力の社長時代に確保したことを思えば発電事業の長い歴史をふり返させられる。

また関西大学の降昌も故人が晩年に自ら総理事になってこの大学の

発展に苦心した努力が今日結実している。かくて夜長の思い出話は先人の追憶より産業振興や学運興隆の現在にまで展開せられた。

解説

山岡順太郎の没後30年目にあたる1957年11月22日、大阪市中央区今橋の大阪倶楽部において、故人と縁故の深かった80余名の出席を得て「故山岡順太郎追憶懇談会」が開催された。後日、この会で披露された回顧談を取りまとめ『故山岡順太郎翁追憶会の記』が刊行された。B6判、54ページ、1ページ46字16行、私家版の小冊子で、口絵には山岡順太郎の肖像写真が掲載されている。『故山岡順太郎翁追憶会の記』は、山岡順太郎に関する貴重な資料であるが、私家版で閲覧が難しいことから、明らかな誤植、誤字、脱字を修正のうえ再録することにした。また、本文には今日の観点から見れば考慮すべき表現・用語があるが、原本のままとした。

山岡順太郎(1866~1928)は、土居通夫(1837~1917)の後を継いで1917年から1921年まで、大阪商業会議所会頭を務めた大阪を代表する財界人であった。1920年から評議員として大学の経営に参画し、1922年に総理事、翌1923年には学長にも選出され、本学経営の中枢を担った。当時の本学では、専門学校であった私立関西大学から大学令による関西大学への昇格を目指して、資金調達や千里山での新学舎建設など困難を伴う多くの事業を実施していた。山岡順太郎はそれらを中心となつて進め、1922年に大学昇格を実現した。

こうした業績から、山岡順太郎は本学にとつては中興の祖と位置付けられる人物で、『関西大学百年史』でも多くのページをあてている。しかし、当然のことながら、そこでは本学とかかわる内容が主となっている。その他山岡順太郎に関しては次のような文献が確認できるが、会社経営者や財界人、

また家庭人としての面は、さらなる調査・研究が必要となっている。

鹿子木彦三郎『山岡順太郎伝』（1929年11月）

蘭田香融「山岡順太郎」（『関西大学百年史 人物編』所収、1986年11月）

和田康由・寺内信「山岡順太郎と大阪住宅経営株式会社」（『日本建築学会 計画系論文集』486号、1996年8月）

和田康由・寺内信「山岡順太郎と住宅経営論」（『日本建築学会 計画系論文集』488号、1996年10月）

山田雄久「戦前期大阪における鉄道企業と鉄道関連事業…山岡順太郎・山岡倭による企業者活動を中心に」（『都市と公共交通』42号、2008年6月）

熊博毅「関西大学中興の祖 山岡順太郎の洋行絵はがき」（『関西大学年史紀要』26号、2019年3月）

このなかでまず参照する文献は、鹿子木彦三郎による『山岡順太郎伝』であると思われる。『山岡順太郎伝』は、山岡順太郎の一周忌1929年11月26日に刊行された伝記で、多くの関係者・関係機関に取材して編集されている。しかし、材料は集まってもそのまま発表すれば関係者に迷惑を及ぼす恐れがあるため、編者である鹿子木彦三郎が取捨按配したことを緒言で断っている。山岡順太郎に関する基本文献ではあるが、何かしらの制約のある資料である。

今回、『故 山岡順太郎翁追憶 会の記』を再録したことに、話者の記憶違いといった留意点はあるものの、この記録が回顧談をそのまま活字化したものであるので、様々な立場から見た山岡順太郎像が語り示されており、山岡順太郎を多様な側面から捉えることのできる資料となるのではないかと考えたことによる。この小冊子に回顧談が載った出席者は次の通りである。参考のために、『日本紳士録』第50版（交詢社、1957年12月）により、この会が開催された1957年当時の肩書を記した。掲載のない人物は、各種

人名事典を参照して（一）で記した。ほとんどが会社経営者であり、その大半が山岡順太郎の下で働いていた人々である。

主催 岸田 幸雄 電源開発(株)副総裁、山岡順太郎三女婿

主催 山岡 康 山岡順太郎孫

電報 益谷 秀次 衆議院議長

電報 渥美 育郎 大阪建物(株)取締役

電報 白杵善三郎 (大阪窯業セメント(株)社長)

杉 道助 新日本放送社長

牧野 良三 衆議院議員

武藤 嘉門 岐阜県知事

岩崎 卯一 関西大学学長

野村治一良 名村汽船(株)取締役

飯島 幡司 朝日放送社長

岡田永太郎 (株)都ホテル取締役

信藤 孝三 日立造船(株)専務

森 寿五郎 関西電力(株)副社長

太田丙子郎 海難防止協会会長

高津 啓一 豊醬油(株)会長

谷口 直之 太陽電線(株)社長

浜地藤太郎 浜地耳鼻咽喉科病院院長

寄稿 齊藤孝二郎 東星興業(株)取締役

寄稿 高村庄太郎 (武田薬品工業(株)顧問)

付記 再録あたっては、山岡家の現当主である山岡洋氏のご配慮を賜りました。記して感謝申し上げます。

(関西大学年史編纂室)

